

閘門建設までの経緯

尼崎市では臨海部において[明治](#)後半から工業化が進み、[運河](#)等による物流が盛んになると共に、工場による地下水の汲み上げが続けられてきた。その結果[地盤沈下](#)が発生し、市内の約 1/3(特に南部地域)が海面よりも低い「[ゼロメートル地帯](#)」となり、[1934 年](#)([昭和 9 年](#))の[室戸台風](#)や [1950 年](#)(昭和 25 年)の[ジェーン台風](#)等による浸水被害を受けるようになった。

浸水対策については尼崎港改修の一環として、[兵庫県](#)の工事による防潮堤が 1950 年までにほぼ完成していたが、前述のジェーン台風被害の経験から、島状の土地ごとに堤防を築く方式ではなく、海岸線全域を覆う大規模な閘門式防潮堤が計画された。これにより運河の物流機能を維持しつつ、[高潮](#)や[洪水](#)等の浸水被害から地域を守ることが可能となった。

防潮堤の工事分担については大部分が兵庫県の直轄、一部が[運輸省](#)第三港湾建設局の委託となり、総工費 20 億円のうち国が 4 割、市と県が 3 割ずつ負担をした。毎年のように水害に見舞われていた尼崎市は、国の提示した 5 か年計画に対し 3 か年で工事を実施するため、国・県負担金を一時立て替えることになった^[2]。

閘門完成・老朽化と改良



1961 年(昭和 36 年)当時の尼崎市臨海部 1956 年(昭和 31 年)に完成した防潮堤はほぼ当時の海岸線に沿って造られている。中央が閘門。[国土地理院 地図・空中写真閲覧サービス](#)を基に作成



閘門海側に設置された防潮堤 のちに阪神高速湾岸線の高架橋が直上へ架設された。

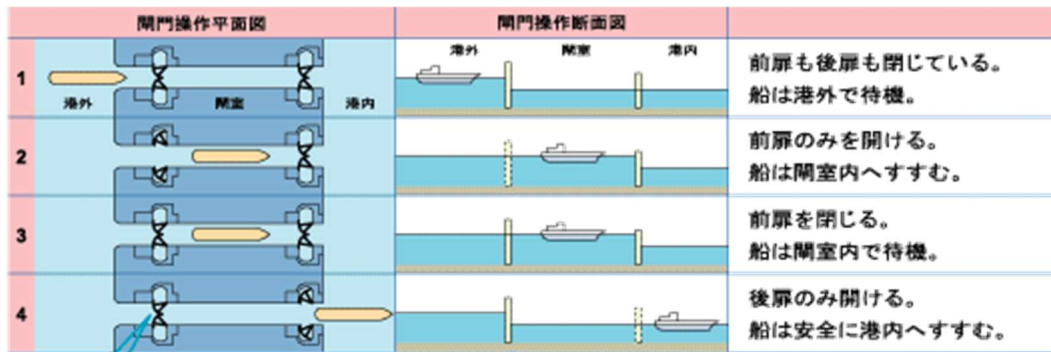
[1951 年](#) (昭和 26 年) [2 月 16 日](#) に防潮堤工事が着工。財源確保の問題を抱えつつも、[1954 年](#) (昭和 29 年) 4 月、[庄下川](#) 下流部分に 1,000 トン級貨物船でも通過できる大規模閘門(第 1 閘門)が完成。[1956 年](#) (昭和 31 年) 3 月には [O.P.+6 - 7m](#)、幅 5 - 9m、延長 12.4km におよぶ防潮堤と[水門](#) 3 基・樋門 1 基も竣工し、[1964 年](#) (昭和 39 年) 度には第 2 閘門も完成した^[2]。

防潮堤は、建設中の 1954 年秋から台風による高潮に対し大きな威力を発揮したが、[1960 年](#) (昭和 35 年) 頃から地盤沈下が進行したため、その後 2 回に渡る嵩上げ工事を実施し、[O.P.+7m](#) を維持した。

また、閘門施設についても施設自体の地盤沈下や老朽化が目立ち始めたため、[1986 年](#) (昭和 61 年) 度より抜本的な改良工事が実施された。工事は旧閘門を使用しながら行なうため、2 基ある閘門を 1 基ずつ造り替える方式が取られた^[3]。

[1994 年](#) ([平成](#) 6 年)、改良された第 2 閘門が完成するが、7 ヶ月後に[阪神・淡路大震災](#)が発生。旧第 1 閘門は被災し復旧に約 1 年を要したものの、耐震設計がなされた第 2 閘門は被害を免れ、地震直後より使用することが可能となった^[4]。その後、新第 1 閘門の完成を経て、[2005 年](#) に集中コントロールセンター建設を含む全ての改良工事が完了した。

■ 閘門のしくみ



▲セクターゲート

扇形をしたこの扉を少し開けると、中央からの水流と円弧沿いの水流が、閘室の中央で消し合い、船にやさしい構造となっています。

尼崎閘門の規模

前扉の高さ	T.P+5.7メートル
閘門の幅	17メートル
閘室の長さ	90メートル
閘室の深さ	T.P-6.8メートル
ゲートの重さ	260トン(前扉)
船の大きさ	500 総トン
通常の水位差	1.0メートル

●後扉天端高 T.P+2.3m



▲尼崎閘門

《道意神社の説明・御由緒》

阪神尼崎センタープール前下車、線路に沿って西へ徒歩五分ほどのところに建つ。阪神尼崎センタープール前駅というと、どうしても駅の北側に広々と展開している競艇場に眼が向いてしまう。しかし、駅の南側の線路に沿った民家が、なかなか重厚な造りで並んでおり、尼崎の時代的な層の重さを物語っている。神社は、こうした重厚な造りの民家に沿って、西に歩いたところに建っている。このあたりは高架になっているので、電車に乗りながら尼崎南部地帯の工場群が展望できるようになっている。今日、多くの会社や工場に祀られている神社や神棚は、企業共同体の守護神である。祭祀を行っているところも多い。ただ単なる工場地帯と思って眺めているのと、毎月清められている会社・工場と思って見ると印象がまた異なるのではなかろうか。世界をリードする日本の産業界には、こんな隠れたカミゴトがなされているのである。

当社は、承応2年（1653年）、当地の開拓事業に着手した大阪海老江（現在の大阪市福島区）の医師、中野道意翁が郷里の八坂神社を勧請したのがはじまり。

寛文9年頃は牛頭天王社とも称されており、30余軒の宮座を組織し、毎年3人を選出して宮守を行っていた。また3段余の土地にてその収穫をもって毎月、旧暦1月26日春祭、8月1日湯上祭、9月26日秋祭を斎行し、氏子衆を招きて饗応し、若衆は寺子屋中丁稚中が集まって参道に数百の献灯を奉納。また奉納相撲を行い大いに賑わったという。

明治6年（1873年）に村社に列格し素盞鳴神社となる。昭和27年（1952年）、宗教法人法による登録切り替えの際に現在の「道意神社」に改称された。

東の蓬川と西の武庫川にはさまれた当地は、往古葦原の生い茂る大湿地帯で、たびたび高潮被害に遭ったが、18世紀になると土地も安定し、綿作が発展していった。その後、昭和10年代に臨海部の工業化に伴い都市化が進められた。戦後高度経済成長期に入ると、人口の流入及び企業の進出が爆発的に増え、それに伴い当社神域の整備が進められた。

当社のように荒撫地を新しく開拓して神社を勧請した例は、他にも初島稻荷神社や元浜八幡神社などが尼崎にある。

宮司さんのおはなし

現在の社殿は、尼崎には珍しい盛り土に造成された場所に昭和38年に建てられた流造り。平成7年（1995年）未曾有の阪神淡路大震災にも耐えたが、平成13年に本殿の改修工事がなされた。絵馬堂には以前あった本殿の破風が飾られ、江戸時代の絵馬一体が奉納されている。

